

ソーラーランプで起業～インドネシアにおける農村女性の教育～ グロリア・アリーニ（インドネシア）

教育といえば、私たちは必ずと言っていいほど子どもを思い浮かべます。例えば、Teach For America やそのインドネシア版と言える Indonesia Mengajar などの教育プログラムは、優秀な大学新卒者を国内の教育困難地域にある小学校に教員として1～2年間赴任させています。これらの取り組みは次世代を担う若者の育成に飛躍的な前進をもたらしているとして、総じて高い評価を得ています。

とはいえ、子どもの人格を形成するのは、学校だけの責任ではありません。インフォーマルな教育は、家庭から始まっています。両親、とりわけ母親は、子どもの教育においてより重要な役割を果たしているのです。家庭に尊敬できるロールモデルが存在することが、子どもの健やかな心理的・道徳的発育を促す鍵となります。

このように、大人に対する教育は児童教育に劣らず重要であるにもかかわらず、大人への教育は概しておろそかになっているのが現状です。

大人は既に学習年齢を過ぎているという認識があり、また家計や育児の責任も抱えているため、もはや学習に費やせる時間もその関心も失っているのです。成人女性は二重の意味で社会から取り残されており、特にアジアやアフリカ地域の家父長制社会ではそれが顕著です。そのような社会では、主婦業や家族の世話が女性の役割となっており、どちらもあまり「教育」が必要だとされていません。社会的資源に恵まれず、家父長制に基づく価値観が「現代」社会においてもなお根強く残る遠隔地の村では、欧米のジェンダー平等の概念や農村部の成人女性を対象とした生涯教育という発想は、事実上存在しません。

過去3年間、私が共同設立した社会事業 Nusantara Development Initiatives (NDI) (www.ndi.sg) は、インドネシア国内の電気が通っていない遠隔農村地域で活動を行っています。この事業は、農村部の女性を対象にソーラーランプで起業できるよう訓練を行うことで、エネルギー面での貧困からの脱却を目指しています。私たちはこのような女性に対し、環境に優しく高品質なソーラーランプをコミュニティに販売する、スモールビジネスの起業を促しています。



NDIの仲間たち

これらの女性は30歳から60歳までの主婦で、それまでほとんど教育を受けていません。

なかには、読み書きがあまりできない年配の女性や、一家の大黒柱として家族を経済的に支えなくてはならない離婚経験者、ビジネスに挑戦しようという進取の気性に富んだ若い女性など、さまざまな人たちがいます。しかし、彼女たちには共通していることが1つあります。それは学びたい、視野を広げたいという願望を強く抱いていることです。

ある50歳の女性は、恥ずかしそうにこう言いました。「私は学びたいのです。もうこの歳だから、こんな機会は他にないでしょう？」

もちろん、年配の女性に対して何かを教えるには、子どもを対象とする時とは異なる教育上の戦略が必要となります。これらの女性を起業家として養成するために、NDIは製品に関する知識、コミュニケーションスキル、マーケティングスキル、セールステクニック、簿記などを網羅した独自のモジュールを開発しました。農村部における識字レベルは比較的基礎レベルなので、これらの女性が取り組み易いように工夫した教材を用意する必要があります。具体的には、文字を減らしてビジュアルを盛り込んだ教材や、双方向型の実践的な学習活動やゲーム、歌、寸劇を採り入れることなどです。

さらに、教室を飛び出して参加者を別の村に連れて行き、実習のセッションを行います。新たに身に付けたスキルを駆使し、ソーラーランプを「ファミリア・ストレンジャー（見慣れた他人）」に販売させるのです。参加者が初めて販売に成功した時の表情を見れば、喜びとはこういうことだと実感します。

卒業生にはそれぞれ卒業証書と、ソーラーランプが5つ入ったビジネスキットが授与されます。こうして、彼女たちは誇りを持って起業家として旅立っていくのです。



ソーラーランプ

私たちの生まれ育った場所では、教育を受けることはあまりにも普通で、大半の人がそれを

当たり前ととらえています。しかし、このような農村部の中年女性にとって、学習するということは、自分たちのために時間を割いて指導し、応援し、信頼を寄せてくれる人の存在を人生で初めて得るということなのです。そして、時にそれだけで十分なのです。

ある年配の女性は、自宅のつつましいリビングルームに、卒業証書とクラスの集合写真を誇らしげに飾っていました。この女性は小学4年までしか学校教育を受けていないのですが、最も優秀な成績を収めた起業家として私たちから表彰を受けました。これに対し、彼女の末の息子さんは、母親のことを自慢するように微笑んでいました。

そして、彼女はこう言ったのです。「あなた方がこの村に来てくれて嬉しいです。もっと教えて下さい。もっと学びたいのです。」

この時、彼女は68歳でした。